

**教育改善プロジェクト**

## TOEIC® Listening & Reading Test の導入と e-learning 学修の活用

山岸倫子，水野真理子，  
木村裕三，竹腰佳誉子，藤川勝也，小田夕香理

本報告は、2021 年（令和 3 年）2 月下旬に導入された e-learning システムである ALC NetAcademy NEXT を、令和 3 年度の教養英語カリキュラムに取り入れる試みをどのように行ったかについて記すものである。新年度開始まで 1 か月強というスケジュールの中での試行錯誤の結果、幾つかの問題点が浮き彫りになった一方で、本試みは、令和 4 年度からの新カリキュラムにおける本システムの本格導入の試金石となった。

### 1. はじめに

大学における「教養英語」とは何か、ということを考える時に、TOEIC はそれとは相容れないという意見は根強い。一方で、教育の質保証や学習成果の可視化、また企業からの要請、さらにそれを受けた学生からの要望ということに対応を迫られた時、TOEIC の導入が一つの有効な解決方法であるように見えることを否定することはできない。そのような価値観のせめぎあいの中で、富山大学は 2021 年度（令和 3 年度）より、年 2 回の TOEIC® Listening & Reading Test 受験を全新生に課すことを決定した。それと同時並行的に、全学的な動きとして、サポート期限の終了が近付いていた ALC NetAcademy2 に代わる新たな e-learning システムの導入検討が、2019 年 11 月下旬から開始された。これらの動きは、令和 4 年度からの教養英語における新カリキュラム導入の検討と時期を同じくしていたため、上記の決定や動向を受けて、新カリキュラムに大きく TOEIC の要素を組み込む案が検討されてきた。ただし、TOEIC 学習がカリキュラムに組み込まれ、新たな e-learning システムを活用するのは、あくまで令和 4 年度からを予定しており、令和 3 年度は現行のカリキュラムを維持することとなっていた。ところが、ALC NetAcademy NEXT が 2021 年 2 月下旬に導入されたことを受け、2021 年 4 月に開始する令和 3 年度のカリキュラムに本システムを組み込むという課題に、英語分科会は急遽対応を迫られることとなった。本稿は、英語分科会が、新年度開始が 1 か月強に迫る中で、どのように

本システムをカリキュラムに組み込む試みを行ったかを説明し、来年度に残る課題等について書き記すものである。

## 2. システムの導入から 2021 年度（令和 3 年度）の授業開始まで

### 2-1. 2021 年度（令和 3 年度）に本システムの導入を検討していなかった理由

2021 年度（令和 3 年度）のカリキュラムにおいて本システムの活用を予定していなかったのは、2021 年度（令和 3 年度）用のシラバス提出締め切りの 2021 年 1 月時点では、導入されるシステムの内容や導入時期が不明であり、e-learning の要素をシラバスに取り入れることが困難であったためである。また、これまでの英語分科会内での話し合いにおいて、e-learning システムをカリキュラムに導入する際に生じる問題点が指摘されてきた。例えば、e-learning システムの取り組み状況を成績に加味する場合、取り組み時間で評価するにせよ、取り組んだ分量で評価するにせよ、学生の取り組みの姿勢を正當に評価することが果たして可能なのかといった問題点や、当時導入されていた ALC NetAcademy2 は、学生の取り組み状況に関するデータをダウンロードするプロセスが煩雑であり、その作業を全教員に一律に課すことのハードルの高さが指摘されていた。教養英語は総コマ数が 168 コマと大規模であるため、全クラスの足並みを揃えるには、上記の点において、丁寧な議論と準備が必要であった。

よって、本件を所掌する外国語部会英語分科会教養英語カリキュラム検討 WG（以降、カリキュラム検討 WG）は、令和 3 年度については、新システムが導入され次第、本 WG のメンバーが操作方法等を熟知したうえで、学生を対象としたシステムの紹介動画を作成したり、英語分科会構成員やその他の関係教員に向けて、操作方法等についての FD を行ったりすることで、学生と教員にシステムの周知及び利用を推奨することのみを検討していることを明言していた。令和 4 年度からの新カリキュラムにおいては、全クラスに e-learning 学習を導入することを検討していたことから、新システムに興味関心のある教員だけが、2021 年度（令和 3 年度）後期から、授業内で試験的に使用を開始するという案もあったが、原則、令和 3 年度については、教養英語と新 e-learning システムは、正式なカリキュラム上は関連しない（というよりも、関連させられない）という状況であった。

ところが、システムが ALC NetAcademy NEXT に決定し、2 月下旬に実際に導入される前後から、今となっては経緯が不明であるが、「令和 3 年度からの教養英語で本システムを使用しないのはなぜか？」という話が俄かに持ち上がってきた。高額な資金を投入して購入したシステムであるのだから、なるべく早い時期から使用しない理由はない、という考えが背後にあったと考えられ、それは至極もつともな考えである。しかし、令和 3 年度中は、正式に使用する予定のなかった英語分科会としては、青天の霹靂であり、新年度開始まで 1 か月を切ろうとしている中で、難しい対応を迫られることとなった。

### 2-2. 各教員グループ（英語分科会構成員、非常勤講師、学内協力教員）に向けた FD の開催と依頼内容の錯綜

上記の通り、ALC NetAcademy NEXT が導入されたのは 2021 年 2 月下旬のことであり、カリキュラ

ム検討 WG のメンバーを対象として、アルクからシステムのデモンストレーションがあったのは 2 月 22 日であった。これを受けて、急遽カリキュラム検討 WG 内で、どのように本システムを 2021 年度（令和 3 年度）のカリキュラムに組み込むかについて話し合いが持たれたが、すでに全教員がシラバスを提出している中、突然、本システムを授業に導入することを依頼することは憚られるという意見や、教養英語が 1 単位科目である以上、時間外学習は 1 時間であるが、ALC NetAcademy NEXT を課すことによって、時間外学習時間が、学生にとって負担となるまでに増えるのではないかという懸念が表明された。

一方、教養英語において、何らかの形で本システムを使用する必要に迫られていたため、カリキュラム検討 WG は、3 月 8 日に、専任教員向けの第 1 回 FD を開催した。本 FD の目的は、本システムの概要及び操作方法の紹介と、新年度の授業における本システムの位置づけの説明をすることであった。本 FD までにカリキュラム検討 WG が達した結論は、シラバスが提出されている中で、本システムの活動を授業内容や成績評価に加える等の大きな変更を依頼することは難しいということであった。そのため、本 FD 内で依頼したのは「①個人で使用してみて、操作に慣れる、②可能であれば授業で使用する（TOEIC コースに限らない）、③授業で使わない場合は、学生にシステムの紹介をする」の 3 点に留まることとなった。加えて、学生の学習履歴のチェックについても触れたが、強い要請とはしなかった。

続いて、3 月 15 日に非常勤講師対象の FD を開催した。8 日に行われた専任教員を対象とした FD から本 FD までの間に、様々な議論が進んでいたことから、非常勤講師対象の本 FD では、専任教員対象の FD の内容よりも踏み込んだ内容の依頼を行うことになってしまい、専任教員と非常勤講師への依頼内容に齟齬をきたすこととなった。例えば、専任教員には、上述の通り緩やかな内容の依頼を行ったが、非常勤講師には、英語リテラシーおよび英語コミュニケーションの両方の科目において、学生の学習履歴をチェックして指導することを依頼した。しかし、翌日 3 月 16 日に、非常勤講師の反応を知る機会があり、その際、他大学で同様の試みがあったものの、うまくいかなかった経験等から、全クラスに学習履歴チェックを課するという上記の依頼が、あまり快く受け止められなかったことを知った。また、同日に、本システムの管理者アカウント数が、関係教員数に対して不足していることが発覚し、全教員に管理者アカウントを付与することが不可能であることが判明した。そのため、英語リテラシーと英語コミュニケーションの両科目で本システムを使用することが事実上不可能となった。これを受けて、23 日のカリキュラム検討 WG において、非常勤講師に関しては、英語リテラシーでのみ利用推奨を行ってもらうことを決定した。

現行のカリキュラムでは、2019 年度（令和元年度）より、学内協力教員による「テーマ別」の授業を開講しているため、3 月 24 日、その担当教員を対象とした FD を開催した。「テーマ別」という授業の特性からも、本授業群では、学生に本システムの利用推奨動画を視聴させることのみを依頼する予定であったが、上記の通り、依頼内容が錯綜していたこともあり、FD の途中で、学生への学習促進の声掛けや、学習履歴のチェックを依頼する流れとなった。そのことに対し、学内協力教員より「学生との『契約』であるシラバスに記載していないことについてまでチェックして指導するのは、学生と

の『契約違反』、もしくは『アカハラ』と目される可能性はないか」「e-learning 学習に対する『声掛け』とは、こういった場合に、そして具体的にどのように、こういった文言で行えばいいのか」「全体に対して利用を推奨することは構わないが、単位授与権限がある者として、シラバス外の指導のために、個別に学生に声をかけることには抵抗がある（学生がプレッシャーに感じるのではないか）」といった疑問や意見が表明された。いずれももっともなご指摘であったため、これらに対応するべく、急遽「ALC NetAcademy NEXT の利用推奨方法について（案）」という文書作成を行い、全担当教員に周知・依頼することとした。本文書では、依頼内容を Level 1（システムの紹介のみを行い、学生の学習状況は個別に確認しない）、Level 2（学生の学習状況を個別に確認しないが、定期的に全体に対して声掛けを行う）、Level 3（学生の進捗状況を個別に確認し、個別に声掛けも行う）に分け、それぞれのレベルに応じた周知やチェックの方法、学生への声掛けの方法や声掛け文言に至るまでを記した。また、上記の通り、依頼内容が錯綜していたことを受け、あらためて、英語リテラシーを担当する全関係教員に対して、本文書を通して同一の依頼を行うこととした。新たに FD を開催する時間的余裕がなかったため、本依頼は、スライドを使用した動画（日本語・英語）で行うこととなり、新年度開始直前の 3 月 31 日に、全関係教員に向けて、動画及び上記文書の周知・通知を行った。

### 2-3. 教員及び学生の本システム利用推進の試み

上記の FD 開催およびその後の対応と前後して、本システムの周知・利用促進を目的とした活動を行った。まず、教員を対象としては、3 月 3 日より、教養英語を担当する専任教員向けに、本システムについての情報共有コース（Moodle）の整備を開始した。本コースでは、学生及び教員のログイン方法等の情報や、本システムの説明書や資料、次に説明する学生向けの利用推進動画等の閲覧ができるようにした。本システムでは、アカウントが「通常の学習者」「スーパーユーザーとしての学習者」「管理者」と複数存在することから、本コースに情報をまとめたことで、FD 等において、参加者の誘導をしやすくなった。

また、学生に向けては、ALC NetAcademy NEXT 利用推奨動画の作成を行った。本動画では、本システムで利用できるコース、取り組むコースの決定方法（4 月に受験する TOEIC-IP のスコアを参考にする）、各コースの構成、前期の目標設定（取り組むコースの Stage1~3 の進捗率を 50%にする）等についての案内を行った。本動画は YouTube 上で限定公開を行い<sup>1</sup>、関係教員には、学生に視聴を促すように依頼した。また Moodle 上に、学生向けのサポート窓口コースを整備し、学生のログイン方法や上記の利用推奨動画を閲覧可能とした他、質問を受け付けるフォーラムを設置することで、学生の本システム利用推進の一助とした。

## 3. 2021 年度（令和 3 年度）授業開始後の動き

### 3-1. TOEIC-IP のスコア返却時期の問題

上記の通り、学生には、4 月に受験した TOEIC-IP のスコアをもとに取り組むコースを決定し、早急に取り組みを開始するよう指導することとなったが、新年度が始まる直前の 3 月 30 日に、TOEIC-IP

の公式スコアの返却が 5 月末になることが判明した。5 月末まで取り組むコースを決定できないと学習進捗に影響が出るため、4 月中旬に大学に入ってくるスコア速報値を、どのように学生に通知するかを検討することとなった。また、令和 4 年度からは、1 月に受験する TOEIC-IP のスコアを後期の授業の成績に加味することも検討しているため、速報値を学生及び担当教員に周知することは、今後必須の作業となってくることが予想された。そこで、今回は試験的に Moodle を使用して速報値の通知を行ってみることとした。今回の通知にあたっては、速報値を受領した 4 月 16 日より、分科会長の木村教員が単独で作業を行ったが、生協・教養教育支援室・学務課・木村教員の間で多くのやり取りを必要とし（スコアデータや学籍簿に、間違いや抜けが散見され、作業に支障をきたした）、教員への負担が大きかった。また、膨大かつ間違いが許されないデータを扱う作業であり、今後も教員が単独で行うには負担が過重であるため、作業方法の共有化が急務である。また、必要なデータが複数の部局にわたっているため、それらを一人の教員が一つずつ集めて作業することの非効率性についても議論が必要である。本速報値は、4 月 20 日には学生および英語リテラシー担当教員から閲覧可能となり、23 日には、英語コミュニケーション担当教員からも閲覧可能となった。（授業開始の早い段階で、担当クラスの学生の TOEIC-IP のスコアを知ることができるようになることは、授業を運営する上で有益なことだと思われる。）

### 3-2. 前期の状況と後期の取組み

学期が進むにつれ、2-2.後半に記した依頼内容の実施が徹底されていない場合があることが分かってきた。これについては、新たなシステムの導入に加え、依頼内容が二転三転したことに起因するところが大きいと思われた。6 月末に、木村教員より、非常勤講師用のメーリングリストにて、依頼内容のリマインドを行ったが、状況の改善にはあまり結びつかなかったようである。

また、上記の Level 2（学生の学習状況を個別に確認しないが、定期的に全体に対して声掛けを行う）程度を行っていたクラスにおいても、前期が終了してみると、殆どの学生の進捗状況が 0%であるといった状況も散見された。一方で、独自の試みとして、ALC NetAcademy NEXT の活動状況を成績に組み込むことを行っていた授業では、多くの学生の進捗率が、利用推奨動画で推奨された目標に到達していた。これらのことから、学生の学習を促進するには、声掛けだけでは不十分であり、学習状況等を成績に加味するという対応を取る必要があることが明らかとなった。

この状況を受け、後期にどのような方策を取るかを検討する必要が出てきたが、それと時を同じくして、第 3 期中期計画の評価結果を受けた執行部より、同一科目名の複数コマ開講における成績評価の統一について改善を行うよう指示があった。これを機に、これまでは成績とは関連させていなかった ALC NetAcademy NEXT を、令和 4 年度からの新カリキュラムの試行の意味も込めて、成績に取り入れるという方向に舵を切ってはどうかということになり、後期に開講される英語リテラシーの全クラスにおいて ALC NetAcademy NEXT の取組みを 10%として成績に組み込むこととなった。しかし、本システムにおける活動のどの要素（時間・進捗状況・その他）を成績に反映させるのかについては議論が進んでおらず、後期については、その判断を各教員に委ねることとなった。本件については、

9月6日に、2回のFDを開催し、授業担当教員に上記内容の周知・依頼を行った。

#### 4. まとめ

今回、限られた時間で試行錯誤を行う中で、様々な難しい局面があったが、令和4年度の試金石となったという意味では有意義な取り組みであったと考えている。令和4年度から、TOEIC-IP および ALC NetAcademy NEXT を本格的にカリキュラムに組み込むことが検討されているが、その開始時期は刻一刻と迫っている。今回の取り組みを通して浮き彫りになった問題点（例えば TOEIC-IP のスコアデータの取り扱いや、ALC NetAcademy NEXT の取り組みをどのように成績に反映させるか）については、カリキュラム検討WGで早急に議論を行い、新カリキュラムの円滑な運営に繋げていきたい。

山岸倫子

富山大学教養教育院

水野真理子

富山大学教養教育院

木村裕三

富山大学医学部

竹腰佳誉子

富山大学人間発達科学部

藤川勝也

富山大学人文学部

小田夕香理

富山大学芸術文化学部

#### 註

1. 本動画は、次の URL で閲覧可能。<https://www.youtube.com/watch?v=UpZkj2Ka31k>